

特集

新しい農業のカタチを切り拓く

でっかい 農業の夢

私たちの生活に欠かせない「食」。それを支えるのが農業です。市内では米麦、野菜、果樹や畜産と多彩な農業が営まれています。しかし、農業を取り巻く情勢は、市場価格の低下や TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）問題など、厳しい状況が続いており、農業の衰退が懸念されている日本。三豊市も例外ではありません。そんな中、農業を守るために時代を見据えた発想で、新たな開拓と情熱に胸を躍らせる人たちがいます。新しい農業のカタチを切り拓く農業者を紹介し、夢ある三豊の農業を考えます。



表紙

今月の市民力

笠田高校畜産コースの3年生9人。生き物を相手にしているため、休日も当番を決めて農場に出ています。100kgを超える豚の力は強く、移動をさせたりするときは戦場と化します。それでも全員で協力しながら愛情を込めて育てることは楽しいようです。「もっといい品質の豚や鳥を研究して、皆さんにおいしい物をお届けしたいです」と額の汗を光らせながら話す姿は、とても大きく輝いて見えました。



三豊市の人口 ※平成25年6月1日現在 ()内は前月比
世帯数 23,144 世帯(+58) 総人口 66,978 人(-2) 男 31,919 人(-24) 女 35,059 人(+22) ※香川県人口移動調査による

広報 **みとよ** 7月号 目次
平成25年 contents

- 3 特集 **でっかい農業の夢**
- 12 **M's Information** **みとよ暮らしのおしらせ①**
副市長に佐子照雄氏再任 / 市職員募集 / ダンボールコンポストとグリーンカーテン / 年金 / 健康診査・がん検診 など
- 14 **みとよHOT** **ほっとNEWS(ホットニュース)**
- 16 **M's Information** **みとよ暮らしのおしらせ②**
保険料のお知らせ / 瀬戸内国際芸術祭に向けて / 夏まつり・イベント
- 20 **M's** **深読みひろば**
文化財 / まちづくり推進隊 / 育成センター / じんけん探訪
- 22 **7月のお知らせ**
募集 / 相談 / 講座・教室 / イベント / 納税のお知らせ / マリンウェブ情報 / 国際交流協会 など
- 25 保健・相談
- 26 **ここ笑み通信** **～子育てするなら三豊が一番！～**
子どもの食事講座 / 不妊治療費助成事業 / 児童扶養手当 / 特別児童扶養手当 / ウイズの会 / **M's Smile** ふおとぎやらしい / 乳幼児健診 など
- 28 みとよ写真帳 / 編集後記



速報

三豊市が「バイオマス産業都市」に認定される



▲江藤農林水産副大臣より認定証を授与されました

6月11日、農林水産省など7府省で構成するバイオマス活用推進会議において、三豊市が「バイオマス産業都市」に認定されました。今回、全国ではじめて8地域が認定を受けたもので、バイオマス産業を軸に、環境にやさしく災害に強いまちづくりを目指します。

「廃棄物のないまち、環境にやさしいまち三豊市」を目指して取り組んでいる、国内初のトンネルコンポスト方式による肥料・固形燃料製造事業（バイオマス資源化センター）と竹資源の活用を中心とした事業が認められました。この構想は平成34年度までの10年間の計画で、市全域を対象としています。

▼問い合わせ
バイオマスタウン推進課
☎73・3028

でっかい 農業の夢

平成18年の市の農業産出額は180億8千万円で県全体の22.7%を占め、県下第1位。また、生産農業所得も37億2千万円で県全体の18.7%、県下第2位と、市の主要産業の礎を築いてきました。そこで今月の特集は、野菜などを生産している耕種農家と畜産農家・飲食店の連携、農作物の加工や販路拡大に取り組む人たち、新しい作物に挑戦する人など、三豊の新しい農業設計に奮闘する農業者を紹介します。

農業従事者の8割強が60歳以上

かつて基幹産業であった農業。しかし、高度経済成長期を迎えると、産業構造も大きく変わりました。販売農家数はわずか15

年の間に約4割減少しました。平成22年の販売農家は3,599戸で、農業を主に従事した人は5,313人。実にその85%が60歳以上です。農業者の高齢化や後継者の他産業への流出などから、農業を続けていくことができない農家が増

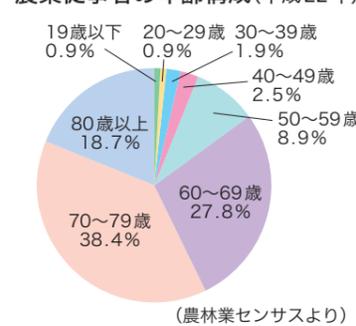
担い手の確保が大きな課題に

え、耕作放棄地も増加。平成7年に639畝だった耕作放棄地は、平成22年には1,320畝と15年間で約2倍以上にまで増加しました。

農家数と耕作放棄地面積の推移



農業従事者の年齢構成(平成22年)



農業者の高齢化・後継者不足、そして耕作放棄地の増加と農業の衰退に歯止めがかからない。昨今、担い手の確保が市の農業施策の大きな課題となっています。



連携

増田畜産 増田孝さん(37)

養豚業のほか、米や野菜の生産も行っている。オリジナルのブランド豚を県内のみならず、東京方面にも出荷するとともに、環境にやさしい経営にも取り組んでいる。

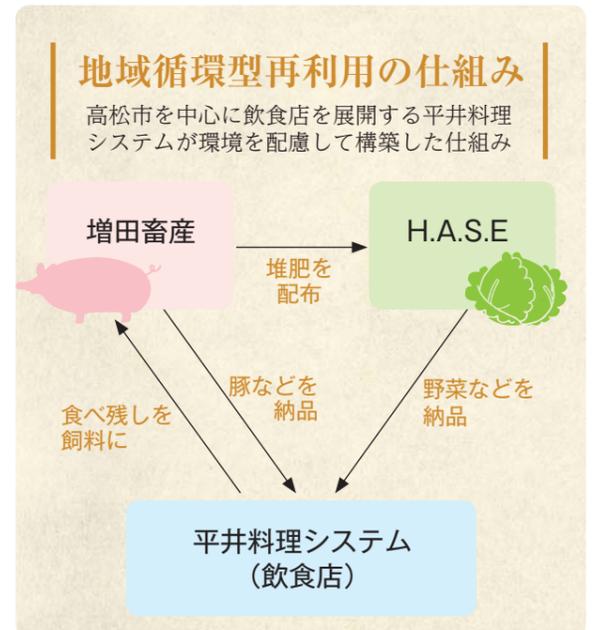
H.A.S.E 長谷川和也さん(33)

10年前にUターン就農し、平成22年に農業生産法人を設立。主要作物であるキャベツは約17畝の農地で作付けしている。同年代の農業を志す研修生の受け入れも行い、若い担い手育成にも力を注いでいる。

「畜」と「耕」と「店」がエコで連携

養豚業を営む増田孝さんとキャベツを中心とした生産している長谷川和也さん。5年前から連携して行っているのが環境に配慮した仕組み「地域循環型再利用」です。

この仕組みは、飲食店が出た食べ残しを増田畜産が飼料の原料として回収。増田畜産で出た堆肥



魅力ある農業を次の世代にも

「食べた瞬間にすぐうまいと感じる物を作って、皆さんに届けたいです。」

は、H.A.S.E.を中心に市内で配布し、2人が生産した豚や野菜を飲食店で提供するというものです。廃棄物の発生を減らすとともに、安心でおいしい食の提供を実現しています。

循環型で海外にも挑戦

「環境への配慮は農業とは切り離すことができないですよ」と増田さん。「畜」と「耕」の連携を行う若き2人は「環境へのこだわりは持ち続けますよ。将来は海外に農場を持って、循環型再利用の仕組みを広めたいです」と次なる夢への挑戦を熱く話してくれました。

— いにしえより受け継いできた農地
— 美しき田園風景を守るため —



でっかい 農業の夢



三ノ瀬市スタッフ
左から
岡崎保子さん(64)
川崎道子さん(71)
安藤徳江さん(65)

誰もが来やすい産直市をモットーに運営をしながら、地元的新鲜食材を子どもたちへ届けるため、学校給食にも取り組む。



野菜が取り持つ コミュニティーの場

「新鮮で安い！」が売りの財田町にある三ノ瀬市。平成19年10月にオープンし、買い物客ばかりでなく、地域の皆さんのコミュニティの場としてもにぎわっています。自分の所で採れた



常連さんに聞きました 三ノ瀬市のここがいい！

- ・車に乗らない私にとっては、買い物にも行きにくいけど、とても便利です。近頃もそうやけど、旬のものがあるし、お惣菜や花なんかもあるから嬉しいわ。(76歳・女性)
- ・買い物して、その後におしゃべりできるのが楽しいな。たいてい毎日来るよ。ここは入りやすく、人が温かいし優しいよ。それと、旬の作物だけでなく、生産者が作った漬物が出てくるのも楽しみの一つやな。(71歳・女性)

農作物を販売しようと無人市から始まり、その後、地元の営農集団が、アットホームな産直所として運営を開始。生産者は味や風味が変わらないが規格外となった作物を販売でき、納品は袋詰めだけのため、労力がかかりません。

新鮮な食材を 子どもたちにも

平成21年からは学校給

食向けの生産にも取り組んでいます。「地元的新鲜な食材を子どもたちに食べさせた」という思いから財田町学校給食センターと提携。平成24年度は39品目の農作物を納め、子どもたちに地元の新鮮な食材を届けています。

しゃえんばから 農業を元気に

「菜園場(しゃえんば)

で自分の家で食べるだけの野菜を作っていた人が、地元の子どもたちに旬のものをいっぱい食べてもらいたいと、本格的に作り始めた人もおるんよ」と安藤さん。今では、給食が運ばれている小中学校を訪れて、子どもたちと一緒に給食を食べながら交流したり、農地に招いて農業の体験学習を開催するなど、地域活動も活発に行っています。



農業で地域を 元気にしたい

「財田の農業を考える会」という組織が財田町で1月20日、地元の農業委員や経営者協会員などが発起人となり発足しました。目的は農業から地域全体が発展してほしいとの思いからでした。

事務局を務める岡子さんは「いろんな会で農業の危機をよく聞くけど、どうすればいいかって分からないんですよ。周りの農家がどうやってしよるかも何に悩んでるかもそれで自由に情報を共有・発信できる場が必要だなと。地域の活性を取り戻すには、自分たちがどうにかするしかない」と強く感じました」と設立の経緯を話してくれました。

魅力ある農業を 次世代につなぐ

現在会員は20〜70歳代

農業は分からないことだらけ 相談できるのは心強い！



財田の農業を考える会会員
多田 健二さん(24)

大学卒業を機に地元に戻ってきて、祖父がやってる農業を継ごうと決めました。でも分からないことばかりで、これから自立してやっていけるか心配でした。この会は栽培方法だけでなく、経営の部分とか、いろんな話が飛び交うんですね。まだ、自己流とか儲かる農業とかは難しいですけど、相談できる人が近くにいるというのは本当に頼りになります。

までの30人。月に1回勉強会を開催し、悩みや意見を出し合います。ほかにも農業関係の資料を回覧したり、メールで情報を共有しています。「若い人が儲かる農業をできるようにと、今も試行錯誤を繰り返しながら農業をしてる70歳を過ぎた人もいるんですよ」

と希望というバトンをつなごうとする動きも出てきているようです。「若い頃は経営で一杯なんで自分たちが率先してするんです。魅力ある農業を次世代につなげるのが、今農業をやっている自分たちの重大な責務ですから」と笑顔で語ってくれました。



「財田の農業を考える会」
事務局 岡子浩さん(52)

採種タマネギやミカン、タケノコを生産するほか、県農業士として地域の農業の活性化に取り組んでいる。

でっかい 農業の夢



規格外が 加工でよみがえる

「一つひとつ愛情を込めて育てた梨が、形が悪いからと捨てられるのを見てもつたいな」と思ったんです。味は変わらないんですよ。ジャムだと日持ちもするし、無駄にならないからいいかなと思って」と加工品作りのきっかけを話す宮崎さん。出荷などの忙しい時期だけ手伝っていた宮崎さんが会社を辞めて、本格的に農業をやり始めて4年が過ぎました。



平和農園 宮崎和代さん(40)
両親と3人で梨を中心に果樹を栽培。採れた果物を使ったジャムやソース、ドレッシングなどの加工にも取り組んでいる。

「でも梨は熱を加えると香りが飛んでしまうから試行錯誤の連続でしたよ」と完成までの日々を振り返ってくれました。



「一つひとつ愛情を込めて育てた梨が、形が悪いからと捨てられるのを見てもつたいな」と思ったんです。味は変わらないんですよ。ジャムだと日持ちもするし、無駄にならないからいいかなと思って」と加工品作りのきっかけを話す宮崎さん。出荷などの忙しい時期だけ手伝っていた宮崎さんが会社を辞めて、本格的に農業をやり始めて4年が過ぎました。

子どもにも 安心な食べ物を

宮崎さんの作るジャムやソースは、素材の味と風味をしっかりと残すため、加工はシンプルにして化学調味料などは使いません。それは、除草剤や化学肥料を使わずに、毎日丹精込めて作りあげてきた自慢の果物であるからこそできること。子どもにも安心して食べてもらえるものを作ろうという強い思いは加工にも込められています。

観光農園を開いて 仲間を増やしたい

宮崎さんの夢は、観光農園を開いて、梨の袋かけや収穫、加工品作りの体験をして、農業と向き合う楽しさを味わってもらい、将来農業に就く若者を増やしていくことだそう。

新しい作物栽培が 実を結ぶ



アンファーム 安藤数義さん(62)
ハウスで南国フルーツを栽培するとともに、加工品販売やカフェも営んでいる。

「始めた理由は海外で完熟の南国フルーツを食べたておいしかったから」と笑って話す安藤さん。4年前からマンゴーをはじめ、南国フルーツを作り始めました。建設会社を経営していたため、農業は全く未経験でしたが始めたからにはこだわりの安藤さん。「何かあれば、聞くより見ることで

大切ですから」と鹿児島県まで足を運ぶことも。南国が原産とあって、温度管理など苦労と不安の連続でしたが、それでもとれたて完熟のおいしさを知ってほしいという強い思いが、新しい作物の栽培を三豊で開拓させました。

三豊ブランドで 売り出したい

ハウスで採れた新鮮なフルーツは、奥さんが経営する店(写真左)で販売したり、インターネット販売も。最近では県内のスーパーにも並ぶようになりました。



「もっとと広く南国フルーツを知ってもらって、需要を増やし、三豊のブランドとして地域の人と一緒に栽培していきたいなあ。それが三豊のPRになるしね」と更なる目標を熱く語ってくれました。



「生産品が正当な評価をしてもらえれば、活性化につながるんです。三豊にある自慢の作物を残していくためにも作物の価値を高めることが大事になるんで、今はその土台作りをやっているんですよ」



ロコロツサ 小林遼由さん(58)
イタリアン野菜を中心に年間40〜50種類もの作物を栽培。契約レストランに納品するほか、各種マルシェにも参加。

自分で値を付ける 販売に挑戦

退職後、自然を相手にターゲットを絞ったことがしたいと思い、農地を借りて農業を始めた小林さん。現在は4㏊の農地でイタリアン野菜を中心に栽培しています。丹精込めた作物に自分で値段を付けることができないう流通の仕組

品の良さを伝え 消費者の声をかす

マルシェの良さは自分で値を付ける以外にもあると言います。「品の良さを直接伝えることができるんです。そして、消費者の声を聞き、生産に生かすことができるんですよ」

消費者の感性に 応え続けたい

「値下げするようなことはしません」と小林さん。「丹精込めて作った自慢の物ばかりですから高く売れるように努力していますし、売れておいしいと言ってもらえるとモチベーションも上がるんです。消費者の感性に応えたいという思いはずっと持っていますね」

価値を高めることが 未来の農業に



▲対面販売が生産者と消費者をつなげます

今は市の補助金を活用しながら、曾保産のノンワックスレモンの販売や加工品の開発・販売も手掛けています。一見販売に力を入れているように見える小林さんですが、やはり本職は農業です。「生産品が正当な評価をしてもらえれば、活性化につながるんです。三豊にある自慢の作物を残していくためにも作物の価値を高めることが大事になるんで、今はその土台作りをやっているんですよ」

でっかい 農業の夢



若い力が新たな
研究をスタート



試験栽培を市と協力して
始めています。

消費拡大を図るため
自ら販売も

笠田高校は開校以来、地域の農業者育成の中核を担い、農業・家庭科の4学科9コースでスペシャリストを養成する高等学校です。これまでに市と連携して生ゴミを堆肥化するプロジェクトを行ってきました。今年度は、ふるさとの伝統野菜「三豊ナス」の

試験栽培は高品質化や安定栽培を目的に、ハウスと露地で9種類の比較栽培を開始。栽培以外にも消費拡大を図るため、県内のスーパーマーケットなどで高校生が自ら販売をする予定となっております。栽培試験と販売促進そして三豊のPRを若い



力で行っていきます。

ものを作り
生き物を育てる喜び

笠田高校の畜産コースでは養鶏や養豚の技術を学習しています。養豚では讃岐豚の畜産の一つである讃岐豚などを飼育、研究しています。乳酸菌を加えることにより、豚の腸内環境を整え、肥育日



地域に根ざした活動を

笠田高校教諭
石川浩三さん(51)



笠田高校では地域とつながった活動を多く行っています。出前授業では子どもからお年寄りまでいろいろな年齢層の人たちの前で、自分の取り組みなどを話したりするので、教える環境ができてるんですね。それで自尊心が芽生えます。学校の授業を通じて、もの作りや生き物、自然を相手にする素晴らしさを理解するとともに、地域に根ざした活動が生徒を成長させてくれます。これからももっともっと地域に貢献できるよう生徒とともにいろいろなことに取り組んでいきます。

数の短縮につながりました。植物科学科は、発芽や繁殖が難しい植物をバイオ技術によって増やしたり、培養植物の栽培などを行っており、作った苗は農家へと運ばれています。笠田高校ではもの作りの素晴らしさや生き物を育てる喜びを日々体感するとともに、地元幼稚園や小学校との交流を通じて子どもたちに伝えたり、農家の人とふれあい、地域を元気にしています。

挑戦がもたらす 三豊の元気とでっかい農業の夢

農業を取り巻く環境は厳しくても、それにきちんと向き合って、新しい農業のカタチを切り拓き魅力ある農業へ挑戦を続けている人は、今回紹介した人以外にもたくさんいます。

今は農業者同士はもちろんのこと、異業種の人と交流も図り、連携しながら地域に新しい「力」を生み出そうと挑戦しています。三豊の農業には

大きな可能性があるという大きな夢と次世代に伝えようという強い気持ちを持って。農業者の創造と挑戦から、元氣と希望が三豊に生まれます。

三豊ナスのゆるキャラ デザイン&ネーミング 大募集!

三豊ナスの知名度向上、消費拡大を図るため、魅力を全国にPRできるようなゆるキャラのデザインとネーミングを募集します。選ばれたデザインは着ぐるみやマスク、シールなどになり、高校生と一緒に三豊ナスのPRで活躍します。

テーマ ・三豊ナスを広くPRできるもの
・三豊ナスのイメージ向上につながるもの

申し込み期限 8月9日(金) 必着

応募方法 応募用紙に必要事項を記入し、郵送、持参またはメール

▶申し込み・問い合わせ 笠田高校 ☎62-3345
香川県三豊市豊中町笠田竹田 251

未来の農業者

家業を継ぐためレベルアップ!

県立農業大学校1年
成行瞬さん(18)



家が農業をしていることもあって、自分も農業に携わりたいと思っていました。高校を卒業して、専門的な知識や技術を身に付けるために県立農業大学校へ今年入学したんです。

果樹を栽培したいので、今は果樹全般の講義と実習を受けています。ブドウの房作りは、余分な実を切る摘粒作業とか技術も労力も慎重さも必要になる作業なんでたいへんです。

将来は、最初の植え付けから収穫まですべて自分でやっていけるようになりたいです。

